

別府のタタラ文化

—— 言葉と地名 (2) ——

富 来 隆

目 次

- 一 はじめに
- 二 言葉は、変わる
- 三 「タタラ」の地名
- 四 「千疋」について
- 五 むすび

一、はじめに

ずっと、「言葉」に執着しつづけている私である。

歴史社会学を指向し、マックス・ウェーバーに学びつづけている立場から、その言葉の正しい意味を、正しく理解しようとする。言葉は、道具（モノ）と共に、人間を他の動物から区

別する文化である。道具を作り（技術）、それを使い、またそれを教える（言葉）ということ。それこそ人間の特性である。石器を作り、土器を作り、さらに銅や鉄の道具を作り出す。それは、人間を万物の霊長にまで飛躍させた原動力である。道具や技術の発達。それに伴って言葉もまた進歩し分化してゆく。

そのさい、石を溶かして銅や鉄を作り出すという鍛冶の技術は、世界的にみて、まさに魔法使いの仕業しわざであったのに違いない。だから神話や古伝承、さらに昔話やお伽話にまで、この種のことばが溢れている。大蛇や小人の活躍などもその一証である。日本の神話や伝承もまた例外ではない。昔話だけでなく、地名などにも金属文化が多く見られることが、明らかにこれを示している。

好例に、神武天皇の東征における大和の伝承がある。

八咫のカラスの先導で、大和の菟田の穿邑に兄猾・弟猾を討つ。ウタは、大分県にも現存し、砂鉄の地。その実例は清川村の宇田枝に、祖母山の大蛇神が通ったとされる花本姫の伝あり、洞穴は強い鉄分をふくんだ泉が湧いている。穿邑とは、採鉱・洞穴の村の謂であらう。

つぎに、天ノ香山(カグニ鉦 Kwane)の朱土を取って天神地祇を祭る。さらに、高尾張邑に赤銅の八十梟師を攻める。その人となりは、侏儒(こびと)に似ていた。

さらに天皇の皇妃は、ヒメタタライズヒメ。その妹のセヤタタラヒメ。ともにタタラヒメで、三輪山の狹井社(サイニ砂鉄 So.)に祀られている。この社の井戸も強い鉄分で、鼻をつくよううで、飲めなかった。

神武天皇の周りは、敵方も、御自身にも、銅鉄の金属にとり囲まれた物語であふれている。

近ごろ私は、書紀の景行西征や豊後風土記の物語りもまさしく銅鉄の金属文化そのもので、「豊国」とは鉱業国の呼称なのではないか、と考えている(小著『豊国の歴史を彩る英雄たち』)。宇佐八幡が鉱業神なることは周知のところ。そして、祖母山の神も風神・鍛冶の神で

あった。それが後に、風止めの神として農業神に変わったのである。丹生(水銀朱)の神さえも、阿蘇の神と共に農業神に変わってしまったのは驚きであるが、これも農業国の神としての変容にちがいない。

このような状況からみて、すでに『風土記』の昔から温泉郷として世に知られている別府も、その一面にまたタタラ文化の顔をもっていることを、本稿であらためて追求してみたい。

二、言葉は、変わる

テレビが普及し、資本や人間の移動もあって、地方の言葉(方言や地名など)も急速に変っていく。それだけではない。一本化した世界のなかでの日本の地位が高まったこともあって、外来語(略称)の日本語化がすすまじい。この一兩年でも、連日のようにPKO法案とか、NGO活動、またODAなどの記事がつついてきた。法案が通ったあと、もう今、PKO(国連平和維持活動)のPKF化(平和維持軍化)の心配が、巷間でもとり沙汰

されている。消費税の増税は、既定の路線のようで、これでは首相の言う「生活大困」とは誰の生活のことなのか。これらがすべてPKO法と結びつくとすれば、政界言葉の実体はまことにつかみにくい。

ローマ字の略語だけではない。カタカナ語の氾濫にもひどく悩まされる。サミットとか、セクハラ、エイズ、またダイエットなどは良いほうである。つきつぎの新語には、なかなか付いて行けない。念のため、先日、ダイエットDietを辞典でひいたら、①食物・食事の規制とあり、②国会・議会（日本などの）、とあった。おどろき入った。まこと、皮肉な言葉ではある…。

社会生活のすみずみまでカタカナ語があふれている。これが日本語の特性なのであろうか。何でも日本語化してしまうのが日本文化なのであろうか。

その一方では、古い言葉がそのまま固定化し、新しい適応語が生まれてこないものも多い。

知らない人を、道で呼びかけるとき、やはり、「もしもし一寸」とか、「あのう…」とかで始まって、つきに「オジさん」とか「オバさん」と言いかける。

テレビで、あるタレントが、「私は、オバさんと呼ばれたい」と言っていたが、それで困ってしまう。何と呼んだら良いのか、を教えてくださいな。いままの、一方的な宣言では答えにならない。これではイヂワル・オバさんの言葉であろう。

いまは、これらは一応別のこととしておこう。

歴史的な言葉の変化も、やはりむつかしい。言葉と道具との進歩が緩な文化は、人間としての根本的な存在にかかわる、と言っても過言ではない。言葉に執着しつづけている私であるが、地名と文化を考えようとして、地名の変化に困惑することが多くある。

近ごろの行政的な、全く新しい地名付けは別として、歴史的には、文字が変わっても変更の経緯が分れば理解もできる。発音が似ていれば尚のことである。しかし、左様でないばあいは、推定するのに苦労する。いろいろな諸説の分れる所以である。

本題に入ろう。南部の「濱脇」の地名から始めたい。「濱脇」が、もとは「濱湧き」（温泉が湧く）であり、それからの転字であろうとすることには、異存がないだ

らう。瀬戸内海の中央東部の「塩飽諸島」(しわく)が、じつは豊後水道と紀伊水道とから出入する潮(7:3の比率)の合流点として、満潮時に「潮湧く」の意味からの転字であることと比べれば、理解しやすい。

つぎに「石垣原」(いしがき・ばる)の変化のことはよく分る。末尾の原(はる)がとれた。そして南石垣と北石垣とになり、最近また変って、石垣東・石垣西となった。原の字がとれ、方向語が、上についたり下についたりしても、本体の「石垣」がそのまま残っているのによく分る。「原」(はる)とは、朝鮮古語の「村」(パル=Pol. pun)の音写であったのだが、元の「村」の意味が忘れられて、「野原」の原(はら)のように思われての脱落であろうと思われる。

似たような例を二、二、大分で取り上げてみたい。

南大分平野(古代大分の中心)で、大分川北岸の「国府」(ふる・ごう)の西にあった「舟生津留」(ふう・つる)が、末尾の「津留」(つる)がとれ、文字が「豊饒」(ぶによう)と変っている。その津留の痕跡は、いまも国道の東に沿って、二本の細い水流(つる)

が、地図上に記されている。その先端は、大分川の氾濫でえぐられて、小字「川成」となっている。「豊饒」の文字が漢音の「ほうじょう」ではなく、呉音で「ぶによう」と読ませるのは、「舟生」との類音で、好字を用いたということで理解されよう(前号、参照)。

もう一つ、むつかしい地名には「雄城台」がある。南大分平野の西南隅にあり、その昔は「雄城」(をき)であった。近来東京語の「台」とか「丘」の文字を付けるのが流行している。かつて、全国的に、町名に「銀座」が流行したのと同様である。その「雄城」に台がつき、読み方もにごって「をぎのだい」と言うようになった。別府でも、鶴見丘高校・鶴見台中学校などがある。

この「雄城」、じつは「沖」(をき)の類音からする宛て字である(『大分地名辞典』)。沖とは澳と同音で奥と同じ意味である。必ずしも海上とはかぎらない。半島のばあい(鶴見町など)もあれば、平野の奥のばあいもある。宇佐平野の南奥で、駅館川をさかのぼって、妙見山の東に、「沖」の地名がある。「沖」の文字から、後世、海上とする解釈なども生まれてくる。

「沖」に似て「島」の語も同様に使われる。こちらは孤立した高地を言う。やはり海でも平野でも、山中部の高地でも用いられている。大分川東岸の「碓山」をまた「碓島」ともよぶ。となりに「片島」がある。どこにもある「田島」とか「森島」(また森山とも)などを考えれば、よく分かる。また他から孤立している「むら」や人間の「集団」そのものも、「しま」と呼ばれることは、よく知られているとおりである。

それはさて、「雄城」を「をき」と読むのは、大変にむつかしい。高崎山の南麓に「妻ヶ城」があることを知っている者には、「おとこ・じょう」と読みたくなる。本来の地形名詞たる「沖」のことを知らなければ、難読の代表例にもなるだろう。

別府にもどうう。『風土記』にみえる「河直」(かなお)が、いまの「鉄輪」(かななわ)であることは、それが類音のこととして納得できる。しかし、どうして此のような文字が使われるようになったのか? 文字の意味を考えると、困ってしまう。

「河直」は、川がまっすぐ、という地形名詞である。

「鉄輪」は道具である。西日本の自在鉤に対する、東日本の鉄輪という文化の相違(宮本常一氏)を考えると、集団の移住があったことになるのか? この道具の移入がよほど目についたのか? 単に類音というだけでは片付かない歴史的問題をふくみ、むつかしくなる。

これについて、近ごろ私は、その元は、タタラに伴う地名としての「鉄砂場」(カンナバ)からの転字なのではないかと思ひ始めている(後述したい)。一つの可能性の問題として、一緒に考えてみていただきたい。

これから論じようとするタタラという語は、神武天皇の皇妃名にも見られたように、古来から存し、変らないままのものである。別府にも四ヶ所、地名にある(『市誌』付表)。変らないだけに、①これらがすべて同じ時代のものなのか、②あるいは新旧があり、どれが何時ごろのものなのか、などについても考えねばならない。まずは、調査が先決である。

タタラ地名を地域全体のものとして、その周辺の地名も一緒に、また社祠や伝説とも合わせて、総合的に見る立場を貫きたいのである。

翼をひろげて、M・ウェーバー流に「複眼的思考」を持つことで、少しでも誤ちをふせぎ、ことの真実に迫りたいと念じている。

三、「タタラ」の地名

左は地形図であり、○印がタタラの地名である。



タタラに関係する地名を拾い出して整理してみると、

つぎのような四つの地域にまとめられようか。

(1)〔浜脇〕 タタラ・登り立・穴守・井手ノ口・金毘羅

山・年ノ神・山ミコ・ウト(洞)・山田迫・隠山、

〔内成〕 梶原・トウメン(銅免カ)、

(2)〔鶴見〕 トビ・タタラ・井尻・年ノ神・山王、

〔北石垣〕 鍛冶屋・梶田・井手・井尻、

〔南石垣〕 山ノ神・千疋(前・浦も)・

土穴・牛頭・年ノ神、

(3)〔鉄輪〕 タタラ・風穴・宇土山・水落

・梶原・井手添、〔亀川〕 銅免・ホキ

(洞)ノ元(洞)・小迫・水落・隠迫・庚申、

(4)〔野田〕 タタラ・ドウ山・金毘羅山・

千引、〔天間〕 スナ畑・荒金・鉦地・

登り立、〔内籠〕 新ノ掛・梶久(鍛冶

給)・堂免(銅免カ)、〔小坂〕 (内籠

の梶久の対岸に)牛頭、

以上は、昭和六十年版『別府市誌』の付

表と付図とによって作成してみた。

地図でみるように、別府の地形の特色として、山も平野も海岸線も、タテに南北に連なる。したがって、河川は西から東にと、ほぼ平行して流れ、地域をつくる。

別府のタタラ地名は四ヶ所、そのいずれもが川の上流にあり、山ふところの、かつて森多きところに在った。

「鉄砂七里に、炭三里」という諺があると聞く。この言葉（運べる距離）、別府のタタラにも当てはまる。ただし、まだ遺蹟として調査や発掘されたものはないので、外見上の地形を見てまわることにした。

浜脇のタタラと周辺とは、入江氏が下見調査をして下さった。小字地図もなく、所在も分りにくい地形のところを、古老に聞くなどして明らかにされた。氏に案内して頂いて、南に、河内川ぞいに遡って見てまわった。ついで隠山の近くまで行くことになった。くるくると山や迫谷をまわったので、位置が分からなくなったりしたが、地形上からは左もありなむとほぼ察せられた。途中での横穴古墳群は夏草におおわれ、蛇の巣窟になっていそうで気味のわるい土地柄になっていた。

穴守・井手ノ口・登り立・タタラ、またウト（宇土）

・迫などの地名がある。一番奥がタタラ、そして隠山。その地名が面白いと思ったら、入江さんの曰く、「平家の落人伝説がある、」とのこと、これには恐れ入った。

山深きところ、人里はなれた鍛冶師や山人たちの生活・習俗が、通常の里人たちと遠く異なっていることは、柳田国男翁らの説かれているとおりであろう。とすれば、それが、このような落人の伝説となったとしても、少しもおかしくないと思う。このことは、しばらく措く。

谷川健一氏『鍛冶屋の母』に、次のような文がある。（砂鉄を）ほるには、まず七名から十三・四名のものが一団となって、七尺柄のつるはしで山を掘りくずす。

こうしたやり方をウト（洞）掘りという。山を掘りくずしたあと、谷になってい場所をもウトとよんでいる。掘りくずした真砂土は、あらかじめ掘られた水路の上に落ちるようにする。井手（ユデ）とよばれるこの水路の水は、とおい山谷から引くことが多い。……この水路に溜った砂鉄をあつめた場所を「カンナ置場」という。（これがカンナ場である）溜まった砂鉄を「カンナ箱」に入れて、タタラ場へ持って行く。……

これをみれば、浜脇のばあいも左様だなあとという実感
がわいてくる。明治末に、金銀鉞を掘ったという別府鉞
山の跡(昭八『別府市誌』)にも寄った。洞穴というよ
りも、深い迫谷で、水は強く流れていた。木々は深くお
おいかぶさっていて、やはりウトと呼ばれるにふさわし
い採鉞跡であった。あちこち案内して頂いた。

帰宅して『地名辞典』などを出して比べてみると、別
府の隠山から南に内成をこえて、大分・挾間の側にも同
じような地名のあることを知った。由布川の下詰から七
蔵司にかけて、登り立・宇土・井手・土穴、また金山・
トラメン・カジャシキ・山ノ神、ほかに赤野・黒川・仁
田原とある。亀ノ甲は古墳であろう。

浜脇の側にも赤野の地名があり、宇土の付近に横穴
群、また亀ノ甲がみえる。これが古墳として、横穴群と
ともに、はたしてタタラ・登り立・土穴などの鍛冶地名
と関係するものかどうかは不明であるが、両地域の様子
があまりにも似かよっていることには驚かされる。

浜脇のあと、鶴見のタタラを訪ねた。後藤武夫氏の案
内をいただいた。現在はすっかり開けていて、往時の俵

はないとのこと。ただ井手の水流がそれらしい感じを持
っていると言った程度で、石祠らしいものもなかった。

このタタラの東の田の隣りが小字鶴見で、火男火売社の
所在地である。祭神の一に「火のカグツチの神」があっ
て、「火」の神であり、かつ「鉞土(カグツチ)」の神
でもあること。また境内社に金毘羅社があり、その祭神
が「金山彦」であることからすれば、鶴見とタタラとの
親縁性は、思い半ばにすぎることがある。ここで後藤氏
の説明で、社のシメ縄が他と異なることを教えられた。
なるほど、鶴見岳のツルミに因んで、竜蛇神(シメ縄)
の頭部と尻尾とを逆さにして、二匹がツルンでいるよう
に作られているのには、微笑ましさを覚えた。

北部の、鉄輪と野田との「タタラ」の地名を訪ねる前
にもう一度、参考図書に目を通してみることにした。
つい私の好みから、祭祀や文学のほうに目がむく。

手許にあるもののうち、細谷藤策氏『古代英雄文学と
鍛冶族』、真弓常忠氏『日本古代祭祀と鉄』、また朝岡
康二氏『鍛冶族の民俗技術』をひっぱり出した。考古学
では、新刊の、たたら研究会編『日本古代の鉄生産』の

ほか、森浩一編『鉄』・窪田蔵郎『鉄の考古学』・中口裕『銅の考古学』、古いものではあるが隣県宮崎の石川恒太郎氏の『日本古代の銅鉄製錬遺蹟に関する研究』なども出して見た。意外に面白かった。

新刊のたたら研究会の本には、鑄鉄と鍛鉄のこと、豎型炉と箱型炉の説明が、図入りでされていた。それでびっくりした。箱型炉での、山砂・褐色土・その上にかぶせる粘土の図解をみて、昔のことを思い出した。

大分川畔の守岡（曲）の台地に、小学校を建てることになったとき、弥生期の環濠遺蹟が見付かった。濠の内側に、径5m位の小さな建物址が数多くあり、柱穴の中央に炉のあとがあり、その横に長方形の掘りコミがあった。ホリコミは、長さ1m半、巾60cm、深さ30cmほどでその殆どは中が空で、その横に焼土塊がおかれていた。一つだけ、ホリコミの中に、白粘土がいっぱいに充滿しているものがある、漏斗状の凹みが四つみられた（写真）。なぜだろうと不思議に思った。印象的だった。ここでの遺物には、弥生土器と、砥石と、鉄製品と、それに白粘土とであった。

始めての経験なので、念を入れてと思い、大分大学中村学長から新日鉄大分副所長の秋月陸男氏（いま県教育委員長）をお願いして、鉄製品と焼土塊とを分析してもらった。その結果、鉄製品は鑄鉄で、焼土塊は白粘土と同じと分った。粘土は、鑄鉄用のものとされる。

うれしい発見であった。地名の「曲」にも相応しい。なお、もう一つ。この建物跡の一つに、その一隅にきれいな白砂が方形にしかれていて、そこから銅鏡片が見出されたことである。現在の神社の様子に似ていると杉崎重臣氏の指摘のあったことが印象にのこっている。

氏の父が大分・杵原八幡宮の宮司であったから、この指摘は貴重なものと受けとめている。

このようなことから曲遺蹟でのホリコミが、あるいは製鉄の箱型炉ではなかったかと思われる。今後の参考のために写真と分析表を、のせておく——（大分大学教育部の総合研究『豊後水道域』）——。

当地の「タタラ」ほか鍛冶関係の地名などからして、あるいは同種のものが、今後、発見される可能性もあるうか、と思われるので、特に記しておく。

鉄製品と焼土塊との分析値

(1)

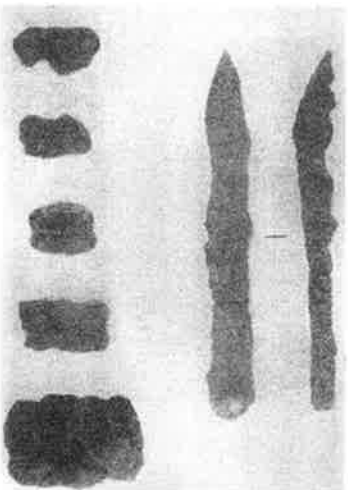
(分析塊) (記号)	(依頼者)	Si	Mn	P	S	Cu	Ti			
9-464	鉄片	1.847	0.01	0.117	0.086	0.004	0.043			

(2)

(分析塊) (記号)	(依頼者)	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃
C 294	焼滓	6.00	0.058	0.36	8.09	49.42	23.74	0.65	1.04	0.95	0.004
C 295	—	5.72	0.058	0.43	7.62	49.38	21.96	0.88	1.07	0.97	0.006
(分析塊) (記号)	(依頼者)	MnO	C	S	P ₂ O ₅	Sn	Ni	Pb	Zn	Cu	V
C 294	焼滓	0.21	0.61	0.039	0.247	0.001	0.003	0.006	0.128	0.003	0.020
C 295	—	0.23	0.63	0.084	0.944	0.002	0.002	0.005	0.114	0.003	0.019



守岡遺跡の建物 (大分市 守岡)



守岡遺跡出土の鉄片の一部
上はやりかんば (長さ13cm)

すでに早く、松本信広氏が『日本の神話』のなかで、炭焼小五郎と相似する伝説が「苗族」はじめ東南アジアの二三の民族に伝承されていること、そしてわが国の製鉄技術すくなくとも砂鉄から鉄を鑄造する技術は、インドシナ半島のカンボジア、中国の福建地方の冶鑄技術と相似していることを強調されている。新旧いろいろの本を参考にして、考えてみる必要を感じた。

また、大分の「曲」のカリが、朝鮮語の Kuri (銅の義、のち金属一般の語となった) の音写であること、また北隣の「碓山」と合わせて考えると、イカリ・マガリの地名は、意外と各地にある。ことに豊前・遠賀川上流の香春鉾山周辺にみる伊加里・勾金と同じことが分るだろう。別府の北の日出町にも同様の地名がある。

香春の三ノ岳からは、銅を主とし、金・銀・亜鉛・鉛・鉄などが採掘されている。ちょうど届けられた『東アジアの古代文化』七二号に、大和岩雄氏の「鷹をシンボルとする秦氏―八幡信仰をめぐる―」に、鍛冶文化が取り上げられ、香春山の鉾物のことが記されていた。

八幡神は鉾業神である。ここ曲マカ(守岡)に、若宮八幡

が勧請されたのも何かの因縁であろう。

別府にも八幡宮は多いが、その周辺にタタラほか鍛冶関係の地名やまた社祠、さらに伝承が残されていることは、湯の街別府という印象からすれば、特筆に価すると言ってよいだろう。

九月になって、後藤氏、入江氏、杉崎氏の都合のつく折りをみて、鉄輪のタタラ周辺から、野田の千引、亀川の隠迫カクレ、竈門八幡などを、地形も同時に見てまわった。

鉄輪のタタラ周辺は思っていたとうりの地形だった。風穴・水落シ・宇土山、その東が原(はる)で、さらに梶屋・井手添とつづく。原は Poi・Pui (バル) の音写で「村」の義だとなると、昔は此処が、中心のムラだったことになる。梶屋とは、鍛冶屋の謂であろう。

迫谷は意外に険しかった。亀川の鉄輪境にも水落シがあり、また隠迫の地名が大友持直がカクレ住んだ所だというのは浜脇の隠山カクレに似ている。ともに「隠」の話から生まれた伝説であろう。

井手や水落シの地名が、掘った真砂土を洗って流すこと、そして溜まった鉄砂を集める所をカンナ場ということ

とも実感できたように思える。

この点からすれば、「河直」・「鉄輪」の地名は、鉄砂場(カンナバ)が本来の意味であり、それからの転字(類音)ではないだろうか。

この推論、まんざら捨てたものではないと替同していただだけよう。ただ、このこと、時代の考証を必要とすることであり、なお後考を俟ちたい。

四、「千疋」について

タタラを追って、別府を南から北まで走りまわった。タタラが山中部に、カジヤ地名は平地部にあった。

そのなかに、南石垣に「千疋」の地名があり、「千疋前」と「千疋浦」(ウラは裏)がある。広い。隣りに「山ノ神」と「牛頭ごず」の地名があり、ともに鍛冶神である。藤内喜六氏から、この千疋と内宿(八幡宮)とに、金山彦を祀る祠ありとの教示あり。これで鍛冶屋の地名と決まった。「千疋狼」のことを思い出した。

さらに、後になって、野田に(羽室台の近くに)も、

「千引」の地名があることを知り、少々あわてた。竹田市にも同じ「千引」があるからである。どうしても避けては通れないことになった。

鶴見権現(火男火売神社)には火迦具土神ほのかぐつちを祀っている。境内社の金毘羅社には金山彦を祀る。ともに鍛冶神である。火迦具土神は「火」の神であるが、同時に「カグツチ」(カグは朝鮮古語の Kwang 鉦の音写)鉦業神のことである。大和の「天ノ香山やま」のカグもそれであり、国東半島北の「香々地」、緒方町の「加賀地」、また竹田の「千引」となりの「鏡」のカグも同じだろう。香々地にはタタラ地名も数ヶ所あり、入江氏・杉崎氏の同行で、三角寛市氏に案内して頂いた。金クソが出るところも多いとのことであった。

金山彦や、山ノ神だけでなく、牛頭天王社(スサノヲ神、これは鍛冶屋の先祖神とされる)の存在もあって、「千疋」「千疋狼」の研究が第一となった。

これについて『南方熊楠全集』二に「千疋狼」の論があり、また柳田国男『桃太郎の誕生』の中に「狼と鍛冶屋の姥」として同じ話が論じられている。しばらく、そ

れによってみたい。



昭和26年2月鶴見タタラ
かねつき場あと



平成4年9月現在の鶴見タタラ

土佐野根山、狼の話。土佐国安芸郡の野根山（ここは県の東境で、徳島県に近く、ちょうど室戸岬の北方にあたる）、昇り降り十里の深山で寂しい所。むかし飛脚一人この山を越すに、山上で一人の産婦が、数十匹の狼に吠え立てられ危ういところを、幸いに大杉の横にのびた枝に上らせ、その危難をさげさせた。

ところが、狼群はこれに屈せず、狼同志で肩梯子をかけ、順々にせり上げ迫ってきたのを、飛脚は一刀を抜き放って、これを滅多切りにした。一狼落つれば他狼が入れ替り、続々とよじ来るのを、刀をふり回して切りつけた。狼ども叶わずと思つて、「この上は崎浜の鍛冶が母を喚び来たるべし」と言い（崎浜はいま佐喜浜町）一匹も残らず逃げ散った。やがてまた狼ども元のごとく集まり、再び肩梯子をかけ、一匹の大白毛の狼、悠々とこれをよじ登る。飛脚が刀を斬りつけたのに、カンという音がした。見れば、頭にナベを被る。めちやくちやに刀を斬りおろすうちに、ナベが破れ、狼も頭に傷をおい、血が眼に入つて、どうと地に落ち、みな逃げ散った。

飛脚は、産婦を助け下し、自分も用件をすまし、崎浜

（野根山下より四里）に参つて、鍛冶をたずねると、一軒あり。知らぬふりしてその家に行くと、奥の間で病人の呻き声がある。問えば、昨夜、老婆、使用に起きて、つまずいて、石で額を打つたという。飛脚、とび込んでその老婆を殺す。時を経てやがて、大白毛の狼と化したので、床下をみれば、食い殺された人骨あまたあった。

話の大意は、右のとうりである。

これと同類の話をつきつきと集めて記されている。

越前国大野郡葛蒲池。また出雲国松江の武士の話し。

甲州北都留郡の犬梯子。伯耆国米子の山伏の、日野郡山中での話し、等々、全国に及ぶ。

さらに中国支那の『広異記』・『酉陽雜俎』に言及。

またボルネオ島の猪の話。また朝鮮の虎やぐらの話。それらは日本から広く世界をかけ回る。

そして最後に、南方翁はつきぎのように言っている。

土佐野根山の「千足狼」の頭領は鍛工の母で、鍋・鉢・または釜を被つて先頭した由。鍛工が妖術や変化に係の厚いのは、外国でもしばしば聞く。アビシニアの鍛工よく狼、ヒエナ等に化身するは、もつとも土佐に近

い、と。

なるほど、世界史的に、鍛冶屋は魔法使いであり、その母も魔女（産婆）として知られている。

これについて、柳田国男翁は、さらに詳しく四国から中国・奥羽まで国内の事例をもって説明される。翁のつけられた目次の順に、主な内容を紹介したい。

土佐の「千疋狼」には三つの特徴をそなえている。

その一は、被害者が産婦であり、最後には山中で安産したこと。その二は、狼が化けていたのは鍛冶屋の姥で、その家の址は今も残っていること。その三は、この話が伝説と化して、杉の木の根株を削って安産の護符にする習俗とむすびついて、曾て有ったことと考えられていることとしている。

一、産杉の伝説―土佐野根山の話・安産の呪

二、犬梯子と猫の知恵―犬梯子・猫か狼か

三、鍋被りと茶釜の蓋―頭領の古猫・茶釜の蓋・鍛冶

四、猫と狐と狼―化け猫の話・大口真神・木上の鏡

五、高木加門の妻―狼の宮と猫の宮・小児と狼

六、朝比奈氏の先祖―家の守り神・狼の産見舞

七、狼と赤児―狼の誕生

八、荒血山（愛発）の物語―樹に登る・山中誕生

九、良辨和尚の杉―鉄の呪力・良辨杉・鷲見氏の起り

○古屋の漏り―山城と狼・おいぬ繫ぎ・猫から狼へ

○狼と鏡と火―血の忌み

各地の例をあげながらの考察である。ことに奥州と土佐と、これだけ土地が離れていながら類似している理由は何故かと問うている。『炭焼小五郎』のぼあいと同様である。九の項において言われる鍛冶は元来木炭を利用する関係から、最も山奥に住んでいて、彼ら独自の信仰があった。鉄の呪力。婦女がお歯黒めを始めてする際には、まず金屋神に詣ることであった、と。

南方・柳田両氏の説をうけ、谷川健一氏『鍛冶屋の母』がさらにこれを敷衍していることも大いに参考とされる。砂鉄をとる谷を、ウト（洞）掘という、等々。

我が大分県では、鍛冶神の代表ともされる八幡大神が豊前の香春岳から、ひろく豊前さらに国東にと勢力をもち、別府もまたその範囲である。ここでは竜蛇神として活動される（蛇と鉄）。その上、県南には風神・鍛冶神

である祖母山神が、大蛇神婚譚をもつ大神氏（おうが）一族と共に、県の南半分にひろがっている。

大分県の鍛冶神は、竜蛇神として充滿している。

そういう中に「千疋狼」の流れをくむ鍛冶地名「千疋」が、別府・石垣と、国東・北江と、竹田・あひあい会々あひあいとに存在することは、やはり注目しなければならない。

国東と別府は、すぐ四国の対岸で、最近まで伊豫との往来の激しい所。ことに国東で「千疋伊豫守」と言われる人物のことが記されており、またすぐ北の富来浦から八坂神社が勧請されていることで、鍛冶の「千疋」のことは想像される。別府でも八坂神社があり、また金山彦の石祠があることで理解されよう。

これに対し、竹田の「千引」（また千疋）は、大野川上流の山中部にあり、場所は竹田・岡城社の北にあたる地。別府や国東からは遥かに隔たる。四国とは、ずっと離れていて、藩主中川公が京阪の地から転封されてきたこと以外には、直接の連想が浮ばない。もし地名のほうが古いとすれば、いよいよ分りにくい。研究しなければならぬが、いまは間にあわない。

岡本杏村著『竹田奇聞』には、「千引」（また千疋）について、次のように記されている。

「天正十四年 大友・島津の戦に、島津軍が豊後に攻めこんだ時、この地に馬千疋をつないだことによる」と。

これは「千疋」の地名から、後代に作られた話であろう。これと似た話として、玖珠町森の名草台の「千人塚」が、大友・島津の戦いで、両軍の死者を葬った場所だ、と言われている。じつはカメ棺・石棺が二百以上もの大群列の地域である。また、同じ「千疋」の別府の地では「石垣原の合戦に、吉弘軍がここに馬を千疋つないだ」とあって、竹田と全く同じような説明がなされる。

同じような地名から、同じような話が生まれること、これは一つの傾向率である。類似の法則とも言われる。それが、こう言う形でお目にかかれるとは、面白い。

ところで、竹田の「千引」の隣りが「鏡」（かがみ）であり、その隣が「赤坂」である。カガミとは Kwang カグ・カガ（鉞）の地の称であろう。国東北の「香々地」、また竹田の東の緒方の「加賀地」と同じであろう。「赤坂」とは、銅・鉄分の謂であろう。八月のお盆

に訪れたとき、先年の洪水で、川の汚れがきれいになり、水底の岩盤が、赤々としていたこと、その下流にきたら、急に黒々と黒ずんでいたことで、ハツと思つた。

ところで、南石垣の「千疋」のほかにも、もう一つ別府に「千引」の地名があることを知つた。野田の地であり羽室台の西北になる。

竹田の「千引」が「千疋」とも言い、別府・南石垣の「千疋」と似た伝説をもつことからすれば、ここ野田の「千引」の地も、おそらく「千疋」と同じく、鍛冶屋の謂であろう。ここは竈門荘の内にあり、そしてすぐ北にある竈門八幡に「金山彦」をまつり、境内に熊野神を祀ること、この点は鶴見の「タタラ」と鶴見権現社との関係に似ている。

しかし、問題もある。南石垣の「千疋」に対し、わざわざ「千引」の文字としたことの意味は？と聞かれるとまた別のことなのかと解されるかも知れない。そこで一応、辞典を引いてみた。「千引」は「チビキ」と読んでゐる。ここでは「センビキ」と言っているのので、竹田と同じ（千引または千疋と書く）と解してもよいのではな

かろうか。類音の宛て字である。

いちおう、右のように考えておきたい。

五、むすび

。鉄は王国なり”とか。古代から現代にいたる。

タタラ、鍛冶屋（梶の宛て字も）、千疋（また千引）、その周辺に風穴・登り立・ウト・土六・井手・水落シ、さらにホキ・迫・銅免などがある。社祠には、八幡神はもとより、カグツチの神、牛頭天王（八坂神社）・金山彦・金毘羅山・山ノ神など。また熊野社もある。

これらの地名のうち、風穴・大迫をひかえている鉄輪のタタラが印象的で、地形的にも理解しやすかった。

杉崎氏が、山陰に旅行した八月に求めてこられた『玉鋼の杜』（金屋子縁起）および『黄谷爐』のなかにも、風と水の重要性がよく記されている。何といつても、タタラには欠かせないものだけに、鉄輪の「風穴」地名が頭にこびりついて離れないのである。

鉄輪北の野田の「千疋」を訪ねたとき、「西ノ谷」に

豊かな泉が湧いているとのこと、なるほど集落がある。さらに弥生期の遺蹟もある、と教えられたが、その南の「ギテウバ」に白粘土がとれると指さされたときには、ドキッとした。その南（鉄輪区）に、「白畑ケ」・「梶屋」・「ギ丁バ」とつづいており、白粘土の産出がホンモノであると分かった。さきに記した大分・曲まがの白粘土のことが強く想い出される。

もう一つ、考えに入れておくべきことがある。鶴見のタタラの南隣りに、ツツラの地名がある。何のことかと気にかかっていたが、浜脇のタタラから南に銭瓶峠を越えた大分側の七蔵司・米山こめやまに、金山・ツツラワラ（ワラは原はらの訛音）の地名があることに気付いた。

「タタラ」と「金山」と。その隣りに同じ「ツツラ」がある。これは矢張り、同じ用途に使われるから、特別に地名化したものではないのだろうか。

ここでは、鉄砂運びのための「葛籠ツツラ」用の材料の場として考えなくなった。ツツラとは「葛」（つつらふじ）の生えている（或いは植えている）所ではないのか。

神々については、鉾業神がやたらと目に入る。八幡神

は言わずもがな、カグツチの神が *Kawane*（カグニ鉾）の音訳であることから、鉾土・鉾地と記されよう。すると天間地区に、鉾地・スナ畑・荒金・登り立、とあるのが気にかかることになった。

甕門八幡に金山彦を祀り、境内社に熊野神を祀っていた。熊野神は、八幡神と同じく航海の神であると同時に、「鑄物師明神」とよばれることが『神道集』（東洋文庫）の初頭に記されている。あの武蔵坊弁慶にみられるように、「山伏が斧を背にかけている」のは「鍛冶のことを示す」とも記されている。

鶴見権現の「火男・火売神」は、逆に書けば「火女・火男」となり、「おカメ・ヒョットコ」となる。私には「ドジョウすくい」は、本当は、鉄砂をすくう「仕業しぐまだ」という学者の説が真実だと思えてくる。

あれを思い、これを考えれば、別府のタタラ文化は、いよいよ本物だ、との感がつよくなるばかりである。

— 以上 —